

寸言

人材育成とは？
—京大探検部の4年間—

安成 哲三

私は1966年に理学部に入学し、学部、大学院(修士・博士課程)に11年間、そして助手として5年間、通算16年間、京大に在籍した。



学部時代、最初は山岳部に籍を置いていたが、2回生からはチリ・パタゴニア探検をめざして二人の仲間と共に探検部に移籍した。そのうちの一人は、井上民二君(その後、生態学研究センター教授。1997年ボルネオでの航空機事故で亡くなった。)であった。探検部とは、いい加減さと厳しさが混じりあった不思議な組織だった。今西錦司、梅棹忠夫、中尾佐助、川喜田二郎など京大を探検大学と呼ばせた^{そうそう}錚々たる方々を顧問としていたが、その伝統は息づいており、探検部の正式な探検隊(調査隊)として承認してもらうには、厳しい査定(?)制度があった。なぜその探検が必要か、現代的意味は何か、実行計画は妥当かなど、綿密に作成した計画書に対し、まず院生を含む先輩からの厳しい批判をクリアし、次に探検部長(当時は四手井綱英農学部教授)を説得し、最後は、前述の錚々たる顧問を一人ずつ訪問し、評価をもらう必要があった。教養部の英語の授業などはサボりまくっていた私だったが、計画書にはこれまでのパタゴニア探検のレビューなどをきっちりする必要があり、そのための文献探しを地理学教室や附属図書館で行い、辞書と首っ引きで英語の文献を読み、その抄訳を作ったりした。2回生1年間をかけてようやく部で正式に承認されると、部長を委員長とし、顧問なども名前を連ねた「京大探検部アンデス・パタゴニア調査委員

会」なるものが設置され、資金集めが始まった。資金集めはもちろん、部長や隊長になってもらった中島暢太郎教授(防災研究所)の重要な仕事であったが、私たちも彼らの会社回りのかばん持ちをやりつつ、自分たちでも多くの企業を回った。企業に顔の利く工学部教授などに頭を下げて紹介状を書いてもらい、それを持って会社を訪問し、募金を依頼するのである。紹介状もない「飛び込み」の募金や物品供与の依頼も含め、半年で800社ほど回り、予算の約1千万円(1968年当時)がほぼ調達できた。もちろん募金だけでなく、チリまでの物資輸送や現地調査のための準備、現地の関係機関との(スペイン語による)交渉など、様々な仕事をこなしていかなければならなかった。3回生の秋、乗船を許可されたチリへの鉱石運搬船が岡山県水島の製鉄所岸壁を離岸した時、苦労がやっと報われたことを実感し、同乗の井上君と喜び合った。現地でもちょっとした事故を含めさまざまな問題が生じたが、4回生の春に何とか無事帰国できた。帰国してからも「探検は報告されてこそ意味がある」という鉄則に沿って、報告会や調査報告書作成、調査結果を基にした卒論書きなどの仕事があった。このようなプロセスは、大学での研究や会社などの事業でも同じことであろう。折から全共闘運動の真っ最中で、自らの「探検」に対する「自己批判」も含めた報告書を作成した頃、5回生も終わりを迎えていた。

現在、京大でもリーダー育成、人材育成の様々な試みがされているが、大切なことは、学生の自由な発案・発想を大切にし、それを厳しくかつ暖かく育て、積極的に支援するという姿勢であろう。探検部の4年間はまさに私にとっての人材育成プログラムであった。

(やすなり てつぞう 総合地球環境学研究所長
昭和54年理学研究科(地球物理学専攻)博士課程修了)